道に咲いた木偶文化・箱まわし

阿波木偶箱廻しを復活する会　芝原生活文化研究所　辻本一英

人形文化を運んで

「箱まわし」とは、『絵本太功記』や『傾城阿波の鳴門』など人気があった人形芝居を、街角や農家の庭先で演じた道の芸です。箱まわし芸人は二人か三人が一組となり、ふたつの木箱に四、五体の人形を入れて天秤棒で担ぎ全国各地を移動して稼ぎました。浄瑠璃を語りながら、一人で人形を遣うのが特徴です。人形師天狗屋久吉は、『天狗久芸談』で「箱まわしは、阿波独特な人形芝居で、明治初年には二百人余りの芸人がいた」と語っています。箱まわしは江戸期から昭和初期にかけて阿波・淡路系の人形文化を全国に運びました。その足跡は、関東から九州に亘ることが文献で確認できますが、北海道から中国の満州や台湾にまで及んだと語り継がれています。

阿波の箱まわし芸人は、正月に祝福芸である「三番叟まわし」の門づけを終えると、讃岐を越えて瀬戸内海を渡りました。岡山県の下津井港や牛窓港に上陸した箱まわし芸人は、瀬戸内から出雲街道を中心に稼働し、中国山地の雪解けを待って日本海をめざしました。鳥取県東部から兵庫県北部を経由し京都に向かう東進組と、出雲街道西進を選ぶ組と人形峠を越え鳥取県西部から出雲をめざす組に分かれたとみられます。他に、和歌山県から三重県や滋賀県を得意先とした組や、愛知県や岐阜県の他、長野県から絹の道を辿り山梨県、神奈川県、東京都、埼玉県、群馬県などに箱まわしの足跡が残っています。

顧客を魅了して

箱まわしは、四体の衣装人形を箱にセットした竹栓に挿し人気外題を演じます。大道の芸ですから、街頭を歩く人に「さわり」を演じて見せ足を止めさせました。農家などに請われて庭先や座敷で演じる場合は、じっくりと演じて御祝儀を受けたといいます。「箱まわし芸人は、二十外題以上演じる事が出来なければ一人前とは言えない」と天狗屋久吉は語っています。彼らは、徳島県西部で座を組み人形芝居興行を行なっていました。舞台では、三人遣いの人形を操る芸人でした。その中でも、キャリアを積んだベテランでなければ、浄瑠璃ファンの求める外題を演じ、満足させることが出来なかったのでしょう。

夢二のふるさと

岡山県瀬戸内市邑久町の酒造業を営む家に生まれた竹久夢二は、明治四十年代に箱まわしの絵と詩を遺しています。箱まわしが夢二の生家を訪れたことが確認できます。夢二の祖父や父親は芸事好きで、よく旅芸人の面倒をみたといわれています。夢二は幼い頃に出会った箱まわしに強い印象を持ったとみえ、彼が描いた絵は箱まわしの姿を正確にとらえています。

人形遣

「めでたやめでたやな
さりとはめでたやめでたや」と
紺の暖簾のつまはづれ
人形遣がきたさうな。
母のかげからそとみれば
人形遣のうら若く
「ま、どうしよぞいの」と泣きいれば
襟足しろくいちらしく
人形の小春もむせびいる。
もの、あはれかふるあめか
もらひなみだの母の袖。

全国に阿波木偶頭の魅力を

その他、各地の人形座の求めに応じて技術指導を行なったり、自らが地方に居住し座を組んだ例もあります。舞台では秀逸な阿波木偶頭を用い、その魅力を余すところなく伝えました。そのことは、人形師初代天狗久をはじめ秀でた阿波木偶頭の販路拡大に繋がりました。天狗屋の『人形細工注文控』には、彼らが指導した座主からの注文が記載されています。セールスマンの役割を果たした箱まわし芸人の文化貢献も見逃せません。

三番叟まわし

箱まわしの「三番叟まわし」は、江戸期から伝わる四国の代表的な祝福芸です。

一人遣いで「式三番叟」と「えびす舞」を演じ無病息災や五穀豊穣等を祈りました。三番叟とえびすがひとつの芸となっている例は他県に無く、徳島県独特の無形民俗文化遺産です。正月儀礼として永く定着した「三番叟まわし」は、昭和四十年代には一部の地域でしか見られなくなりました。現在は阿波木偶箱廻しを復活する会が伝承し、約一〇〇〇軒の民家に福を届けています。

「櫻さく嶋 春のかはたれ」挿絵一部
著者 竹久夢二
発行所 洛陽堂
明治45年2月24日発行より

「三番叟まわし」木偶一式

箱まわし

阿波木偶箱廻しを復活する会の調査と先行研究から、阿波の箱まわし芸人が左記の人形座に関わったことが判明している。（*は現存）

群馬県・前橋市
泉沢人形（旧赤城大一座）
込皆戸三番叟*
神奈川県
斑目人形芝居（足柄座の前身）
相模人形芝居足柄座*
山梨県
追分人形芝居*
長野県
今田人形*
片桐人形（伊那郡中川村横前）
岐阜県
恵那文楽*
半原人形*
大井文楽*
兵庫県
久斗文楽座（豊岡市日高町）
岡山県
住吉座
島根県
大塚人形